

Living the Lotus

Buddhism in Everyday Life

New Year's Issue

歴史・伝統を尊重しつつ前進する

立正佼成会会長
庭野日鑛

**創立百周年へ、全会員が心を一つにし、
幼少年・青年達の育成に全力を**

あけまして、おめでとうございます。

今年も日々真っ新な心で、元気に精進する一年にいたしましょう。

新年の「新」という文字は、「辛」と「木」と「斤」を組み合わせてできています。「辛」は苦労や努力を意味し、「斤」は木を切る大きな斧のことです。すなわち、よく木を愛し、育て、それを努力して加工し、新たなものにして活用することを表わしています。

人間の世界にあてはめれば、先人の築き上げた歴史や伝統を学び、尊重しながらも、現代に相応しい創造力を働かせ、力を尽くして新しいものを築き上げていくことです。

「新」という文字に込められた大事な意味を深くかみしめて、今年一年、共に前進してまいりたいと思います。

さて私は「令和八年次の方針」を次のようにお示しました。

昨年、日本は昭和百年とも言われました。昭和十三（一九三八）年に創立された本会は、十二年後の令和二十（二〇三八）年には百周年を迎えます。

そのことを肝に銘じ、今年も私たちは信仰生活を通して、未来を担う幼少年・青年達を如何にして人道に導き、人間形成をはかるか、如何にして家を斉えていくか、更に、日本の伝統を受け継い



で立派な国を打ち立てていくか、お互い様に、日々生き活きと務めて参りましょう。

平成三十年、本会の創立八十周年に際し私は、来たるべき創立百年を展望して、人を植える（育てる）という根本命題に全力を尽くしていくことが私たちの大事な務めである、と申し上げました。

未来を担う幼少年・青年達を如何にして人道（菩薩道）に導き、人間形成をはかるかは、本会のみならず社会においても最も優先されるべき課題であります。

ご存知のように、本会は、「齐家（家庭を斉える）」を根本の方針としています。なぜなら家庭は、人間形成の根本道場であるからです。

親が、ご宝前を中心とした生活をおくり、常に明るく、優しく、温かい言動を心がけることは、子供たちの人間形成に決定的な影響を与えます。

なかでも重要なのは、幼少年期からの関わり、つまり家庭での教育であります。

「七五三」は、日本の伝統行事として知られますが、この七歳、五歳、三歳という年齢は、本来、学校教育の前の家庭教育が最も必要とされる時期を表わしているといわれます。

そして、頭脳が一番純真に、鋭敏に働くのは、十歳前後から十三、四歳まで。視力が一番あるのは、九歳から十歳で、よく「あの子は穴のあくほど見る」といわれるような年頃です。想像力、連想力、記憶力は、十一、二歳が最も旺盛で、十五、六歳で堂々たる人間になるということです。

こうした大事な時期に家庭での教育が十分になされず、学校教育に任せきりでは、青少年育成など望むべくもないことを心すべきでしょう。子供や若者を取り巻くさまざまな社会的な課題も、結局は親の自覚と責任、行動にかかっているといっても過言ではありません。

「政治も経済も幼少年の教育のためにこそ存在する」といわれた方がいます。つまり大人達

が、青少年の健全な育成にふさわしい世の中をつくり上げなければならないということでもあります。

若い世代が、自分の国に誇りを持って生きることは非常に大切なことです。自分の国を大切に思い、敬えるようになれば、青少年の育成も自ずと進展するからです。



本会発祥の地・修養道場のご宝前を前に

修養道場は1948年12月28日に落成され、64年に大聖堂が建立するまで教団本部が置かれていました。94年の大聖堂建立30周年を機に現在の名称に変更してからも、会員からは「旧本部」として呼ばれて親しまれ、心の依りどころとなっています。2011年の東日本大震災を機に耐震補強工事が行なわれました。その際、かつての修行の雰囲気を実感者に味わってもらいたいとの願いから、ご宝前には、1963年に大聖堂の永寿殿に勧請された庭野日敬開祖直筆の「大曼荼羅」の複製が安置されました。

とりわけ日本は、最も歴史、伝統のある国の一つです。世界にも比類のない天皇・皇室を戴き、そのもとに建国以来今日まで、国民が和となり、豊かな精神文化を築いてきました。

また日本は、上代の頃、国名を「大和」と定め、「大いなる平和」「大いなる調和」の精神を終始一貫することを、国家的な理想としてきました。

聖徳太子は、「和を以て貴しと為す」という言葉を十七条憲法の第一条に掲げられています。

こうした平和・調和を重んじる日本の伝統を受け継いで、立派な国を打ち立てていけるよう務めることは、「人を植える」という観点からも極めて重要であります。

十二年後の創立百年を目標として、全会員が心をつにし、各々の立場で、幼少年・青年達の育成に全力を尽くしてまいりたいと思います。

感謝と生き甲斐を持って菩薩道を歩む—— それが釈尊の一番の願い

私は昨年、数えて八十八歳のいわゆる「米寿」を迎えました。本会では、三月二十日を皮切りに、延べ八回にわたり大聖堂で「お祝いの集い」を開いてくださいました。

集いの中で「校成会に入会して本当によかった」という信者さんの言葉を耳にするたび、私自身、本当に元気を頂いた気がしました。〈校成会員としてお互いに一步一步成長してきたのだなあ〉としみじみ思いました。何より、全国の親戚が集まってお祝いをしてくださったという気持ちが胸がいっぱいになりました。皆さま、ありがとうございました。

人間は誰もが例外なく年を取ります。それが自然の摂理であります。にもかかわらず、多くの人が老いることを嫌い、遠ざけようとします。しかし、老いを嫌っている間は、まだ未熟なのだと いわれます。

老いとは、単に齢を重ねることではありません。数々の経験を積み、思索を深め、人格を完成させていく努力の過程であり、そこに深い意義と誇りを持つようになるのが本来の人間の姿であると教えられています。

もちろん何事においても「これで完成した」ということはありません。ですから、常に学び、人間として向上するよう精進を続けていくのです。このことを宮沢賢治は、「永久の未完成これ完成である」といいました。安易に分かったつもりにならず、生涯をかけて求道していくということでありましょう。

振り返れば、私も若い頃は、校成会の信仰に反発しました。しかし、経験を積み、学んでいく中で、釈尊が私たちにお伝えになりたかった精神がはっきりと分かってきました。そして高齢になってからは、釈尊の教えを我が身、我が心で実感として受けとめています。

「法句経」の中に、すでに皆さまもご存知の大事な一節があります。

「人の生を受くるは難く、やがて死すべきものの、いま生命あるは有難し。正法を耳にするは難く、諸仏の世に出づるも有難し」

現代の言葉にすれば、「人が生命を受けることは難しく、必ず死ぬことになっている者が、たまたまいま生命があることは滅多にないこと



だ。生命を受けたとしても、その生きている間に、正しい教えに接することは滅多にないことであり、仏さまが満ち満ちているこの世、地球に生まれることも滅多にないことである」ということです。

このわずかな言葉の中に、釈尊の教えそのものがあると私は受け取っています。

私たちのいのちがいかに不思議で、尊く、有り難いか。仏法に出遇うことがいかに稀有なことか。それを自覚することは、一番大事な生き甲斐の発見に結びつきます。

不平不満で生きるのではなく、頂いたこのいのちに感謝して、朗らかに生きていく——仏法を頂き、信仰生活をおくるということは、簡単にいえばそういうことではないかと思えます。

もちろん人生には、さまざまな悩み、苦しみが伴います。しかし、いまこの瞬間、どれほど多くのことに恵まれているかに気づくと、くじけずに前を向いて生きていこうという気持ちがわいてきます。これまで不都合と思ってきた現象の中にさえ感謝を見出せるようになっていくのです。

まして私たちは皆、共に仏性を宿し、真理・仏法を認識する能力も、自分で問題を解決する力も具えていると諭されています。

ですから、「自分は至らない人間だ」「私にはできない」といっていないで、仏教徒として、釈尊の教えを素直に受けとめ、実践するこ

とが、幸せな人生を歩む出発点であります。

私はいま、手足が動きますし、呼吸をすること、話すこと、食べることもできます。生きる上で不可欠な空気や水は、自分がつくったものでなく、自然からの恵みです。そして、多くの人々に支えられています。日常のあらゆることに感謝のできる人間になることは、実は、この上ない幸福を得ることにほかならないのです。

人間として生を享け、天地万物に支えられ、生かされて生きている。そのことに感謝し、生き甲斐を持って、菩薩道を歩む——それが釈尊の一番の願いであることを、数えて八十九歳を迎えたいま、改めて心底から分かって頂いています。

このことを信者の皆さまと共に、深く胸に刻み込むことができたなら、人生は真に意義あるものとなるに違いありません。

本会は、二年後には、創立九十周年を、そして十二年後の令和二十（二〇三八）年には、教団創立百周年を迎えます。

信仰生活を通して、齊家による幼少年・青年達の人間形成、日本の伝統を受け継いだ平和な国づくりを着実に進めてまいりたいと切に願っています。

